

ディレクトフォースについて

一日目の午後に笹川平和財団・日本財団・ディレクトフォース主催の夏季プログラムに参加した。私は、最初これらの団体がどのような活動をしているかわからなかったので調べてみました。笹川平和財団は現在、人類の福祉と人間社会の健全の発展に寄与することを目的とした公益財団法人で、日本財団は社会福祉・教育・文化など様々な事業を支援することを目的とした国土交通省管轄の公益社団法人。そしてディレクトフォースは小中学校への授業支援や里山再生活動などのボランティア活動を行う一般社団法人であることが分かりました。講師の皆さんとのグループセッションの中で、講師の皆さんが口をそろえて言っていたことは、「思ったらず行動に移してみる。」「つまらないことこそ一生懸命やってみる、そうすれば将来何らかの形で生きてくる。」ということでした。今までの私は行動するのにためらってしまい、つまらないことだと集中して取り組めないことがありましたが、日本や世界で活躍されている講師の皆さんの言葉には説得力がありました。また国際社会で生きていくため、文化や習慣が違う外国人とどのように接していくべきなのかということも学びました。まずは相手の文化や習慣に興味を持ち、自分の意見をはっきりと主張することが大切なのだと思います。たとえ相手とぶつかることがあっても、関係を続けることで、必ず分かりあえるときがあると信じるのが大切だと分かりました。私は自己主張をするのが苦手なほうなので、しっかりと自分の意見を持ち、自己主張できる人間になりたいです。

OB・OGによる懇談会について

一日目の夕食ののち OB・OG による懇親会があり、二高出身の東大生の方からたくさんのお話を聞くことができました。先輩方が一貫して言っていたことは、大学を選ぶ上で本当に大切なことが学部選びであり、入った大学でなにをしたいのかを明確にする、ということでした。偏差値や知名度などで大学を選んでしまったことにより、大学に行かなくなってしまい、留年してしまう学生もいるそうです。そのためにも、早いうちに自分が興味があると言えることを持つことが大切なのだと思います。

また、東大に通っている先輩方は、「東大は入ってからが大変。」とっていました。農学部の佐藤先輩から時間割を見せてもらったときには本当に驚きました。なぜなら、普段の私たちの時間割に加え、部活動に当たる時間帯にも、授業・講義が入っていたからです。また一コマ105分授業だといいい、大変な集中力が要するのだと感じました。東大は、最初に「科類」を、そして学部学科を選ぶという特殊な形態をとっています。科類から学部に行くことを、「進学選択」または「進学振り分け」というようで、進学選択は学部ごとに定員があるため、それまでの成績を基に決められるのだといえます。そのため、好成績をとれば自分が希望する学部に行くことができ、理転することも可能なのだそうです。

また一橋大学の狭間先輩からは世界一周した時のエピソードを聞くことができました。自分の知らない地域で、自然の雄大な景色にふれ、現地の人との交流を通して、普通では得られないような経験

を得られるということに、大きな魅力を感じました。私自身も、来年のアメリカ研修に参加したいと考えており、将来的には海外で働きたいです。狭間先輩のお話で、一番印象に残っていることは「ズル賢くなれ」ということです。超難関大に合格する人とそうでない人との差はそこにあるそうです。授業を全部聞くことがすべてではなく、自分に本当に必要な勉強をすることが大切だとわかりました。

企業訪問について

二日目午前を外務省に訪問しました。外務省は日本の外交のトップということで、将来海外で働くことを志す私にとって非常に楽しみでした。外務省に着くと、警備員の方が厳重な警備を行っていたので、少し緊張感を持ちました。外務省は東京の霞が関にある外務本省と、世界139か国に置かれている在外公館(大使館、総領事館、政府代表部)の二つから構成されています。外務本省は政策を立案し、方針を決定したうえで、在外公館への指示を行い、在外公館は政策を実施し、相手国との友好関係の良好に努め、外務本省への報告を行います。外務省ではまず、仙台二高出身の稲垣先輩に、外務省に入るまでの経緯や高校時代についてご自身の体験談をきくことができました。また場所を変えて、別の職員の方に外務省についていくつか質問をさせていただき、そのなかにとっても興味深い答えがありました。まず、必ずしも英語を話せなくてもいいということです。外務省には専門職採用というものがあり、例えばスワヒリ語という言葉は話せる人が少ないため、通訳として重宝されるそうです。しかし、英語は世界中で話されている言語なので、身に着けるべきだろうと思いました。次に、日本人の国際的な場での発言力が弱いということです。海外の方は自分の意見をはっきりと主張するので、発言力が弱いと不利になります。うまくコミュニケーションをとるために、様々なことを知って、相手についていく努力が必要だと感じました。

東京大学見学会

二日目午後に東大を訪れました。東大を実際に見たことがなかったので、非常にワクワクしていました。私たちの班は鉄門というところから敷地内に入りました。(あとから地図を見て分かったことですが、門は全部で10数個ありました)時間の都合上、東大の中を散策する時間があり、その中で感じたことは、東大は緑が豊かだということです。特に赤門から安田講堂までの道のりは並木道で、通っていて、気持ちよかったのを覚えています。学部見学では友達と一緒に安田講堂で開かれた工学部の説明会に参加しました。中には巨大なスクリーンがあり、椅子に座って、説明会が始まるのを待っていました。ふとスクリーンを見るとそこに流れていた映像に衝撃を受けました。安田講堂事件でした。その事件を知らなかった私は食い入るように見てしまいました。安田講堂は1888年から1994年にかけて改修工事が行われ、現在に至っているそうですが、実際に弾痕があったそうで、本当に起った出来事なんだと感じました。説明会では、工学部が医学部と連携した、手術ロボットの開発を進めていて、テレビでも特集されていたそうです。工学部は留学生が多いというのも特徴だそうで先進的な欧米の学生と研究ができるというのは、非常に良い環境だと思いました。

昼食を食べた後、理学部を中心とした、研究室等への見学に行きました。まず訪れたのは天文学科

の尾中教授の研究室でした。天文学というと、最初私はただ天体を観察するだけなのではという幼稚な考えでしたが、実際は全く違いました。もちろん天体の観測も行いますが、そのほかにも赤外線の観察も行っているそうです。なぜかというと、星と星の間にある赤外線を見ることで星の成分がわかるからだそうです。また、赤外線を見るためには、望遠鏡を絶対零度まで冷やし、大気の影響を受けない、高地に置く必要があるそうです。実際に2006年から2011年の間に赤外線天文衛星「あかり」が宇宙空間での観測を行っていたと聞きましたが、当時あまり報道されていた記憶がなかったので、驚きました。これまでの天文学に対して持っていたイメージが変わり、天文学の大変さがよく分かった見学となりました。

次に訪れたのは数学科でした。いくつかの研究発表を見ましたが、数式の意味がまったく分からず、次元が違うと思いました。極力理解しようと努め、「特異点」という言葉についてはなんとなく分かりました。私が数学を極め、これらの意味不明な数式を理解することができれば、就学がもっと楽しくなるだろうなと感じました。異次元のレベルまでいかなくとも、数学は精一杯勉強したいと思いました。

他の学科の展示も面白そうでしたが、時間が足りなかったのが残念でした。東大を見学した感想としては、なんとんでも「環境がいい！！」ということです。日本最高峰の頭脳の集結、世界にも引けをとらない研究器具、緑豊かなキャンパスなどなど、さすがは日本トップの大学だと思いました。

今回の東京研修では、東大だけではなく、社会全体や人生観など、様々な知識を得ることができ、自分の視野を広げることができました。関わってくれたみなさん、ありがとうございました。